

看護学生の死生観のとらえかたとその実態

— 学生の作成した質問紙を中心に —

田中愛子* 岩本 晋*

要約

Y看護学院保健婦科の学生に死生観に関する質問紙を作成してもらい、それを用いてY看護学院の学生全員(n=296)を対象に調査を行った。作成された質問紙と調査結果は以下の事を示している。

- 1) 死生観の質問項目は、「自分の死」「家族・身近な人の死」「死の教育」「生について」「臨床実習と生と死」の5つの視点があった。
- 2) 調査を実施する際のインフォームド・コンセントでは、死生観と看護を関連づけて、調査の意図が説明されていた。
- 3) 調査した結果は次のとおりである。97.6%の学生が死について考えたことがあり、81.3%が身近な人との死別体験を持っていた。またこの体験や死についての学習は、生や死について考えるきっかけになったと答えていた。脳死は人の死であるかや、人工呼吸機での延命についての考えは、「よくわからない」という答えが多かったが、生命の誕生については94.2%が尊いものであるととらえている。

今回紹介した質問項目の範囲においては、死の学習やターミナルステージにある患者との関わりなどの具体的な経験を尋ねる項目では学年や教育課程で相違が見られたが、その他の殆どの質問項目において学年や教育課程による特徴の差は見られなかった。

キー・ワード：看護学生、死生観、質問紙

I はじめに

患者のいのちと向かい合う看護婦が、自らの死生観を確立していくことは、極めて重要なことといわれている。さらに近年、多くの高齢者が施設内死を迎える現状や、臓器移植法の施行により「人の死」の見方が多様化した現実を背景に、この死生観形成という課題はますます重要になってきた。

看護学生にとっては、さらに深刻な課題として取り上げることができるであろう。何故なら、彼らは学習の途上において死にゆく人と出会い、人の死と直面することになる。しかし看護学生は発達段階として死生観形成途上にあり(水谷、

1997)、「もし自己の死の主観化が未完成のうち

に他者の死の主観化を強要された場合には、本人はそれをどう受けとめてよいか分からず、混乱に陥ったり、燃え尽き状態になったりすることが少なくない」(山本, 1992,P21)からである。

今回著者らは、Y看護学院の保健婦科の学生の授業の中で、学生に死生観についての質問紙を作成してもらい、その質問紙を用いてY看護学院の学生全員を対象に調査を行う機会を得た。そこでその一連の過程と、そこに見える学生がとらえている死生観とその実態の一部を報告する。

* 山口県立大学看護学部

II 方法

1) Y看護学院の保健婦科の学生40名をA、B、Cの3グループ(1グループ13~14人)に分けて、死生観についての3種類の質問紙を作成してもらった。グループ分けの意図は、グループ討議によって質問項目が精選されていくこと、グループによって死生観についての異なる視点がでてくることを予測したからである。

2) 1)で作成した質問紙を用いて、Y看護学院の学生全員296名(表1)に質問紙調査を実施してもらった。学習活動の都合上全数調査としたが、この方法では、回答者の中に質問紙作成者を4%含んでいる。

表1 調査の対象

課 程	人 数
看護婦科1部課程1年	49
看護婦科1部課程2年	47
看護婦科1部課程3年	49
看護婦科2部課程1年	49
看護婦科2部課程2年	47
保健婦科	40
助産婦科	15
合 計	296

III 質問紙の分析と調査の結果

保健婦科の学生は、看護学生の中でも看護学の基礎を学んだ終点に位置すると同時に、今後の高齢化社会の中で地域の高齢者や高齢者の死と関わる起点に在り、学生の作成する質問紙には、看護学生から看護婦に成長していく過渡期にある看護者としての死生観が反映していると思われる。その意味からも、まずはじめに学生の作成した質問紙に注目してみる。

1) 学生は死生観をどのような視点からとらえようとしているか

主たる質問項目は、表2のとおりである。Aグループ11項目、Bグループは14項目、Cグループは21項目からなる質問紙を作成している。これらの質問項目46項目を内容の類似性でまとめると、以下の5つのカテゴリーに分類できる。それは「自分の死」「家族・身近な人の死」「死の学習」「生について」「臨床実習と生と死」に関するものである(表3)。

(1) 自分の死

「死について考えたことがあるか」「自分が死ぬかも知れないと感じたことはあるか」といった、一般的な項目から、「自殺を考えたことがあるか」「何歳で死にたいか」、「どこで死にたいか」「誰に見守られて死にたいか」といった、具体的な死に方を尋ねる項目まで16項目みられ、その質問の細かさや鋭さは様々である。

(2) 家族・身内の死

「身近な人が亡くなったことがあるか」「家族が死ぬかもしれないと感じたことはあるか」といった、身近な人や家族の死の経験や予期不安を尋ねる項目が4項目みられた。学生自身がまだ若く、切実な二人称の死(柳田,1995)に遭遇していないせいか、自分の死に比べて質問内容に詳細さを欠いている。

(3) 死の学習

「死を題材にした本を読んだり映画やテレビ

表2 作成された質問紙の項目

Aグループ

- 1 身近な人が亡くなったことがありますか。
- 2 死を目前にした（余命6カ月と診断されている）患者を看護したことがありますか。
- 3 死ぬとはどういうことか考えたことはありますか。
- 4 あなたは脳死は人の死だと思いますか。
- 5 延命治療についての考えを教えてください。
- 6 あなたは自分は何のために生まれてきたのかを考えたことがありますか。
- 7 あなたは生まれてきたことを感謝していますか。
- 8 あなたは長生きしたいと思っていますか。
- 9 あなたは将来への夢や希望を持っていますか。
- 10 あなたは死を題材にした本を読んだり、映画やテレビ番組などをみたことはありますか。
- 11 そういふもの(10)* に接することは生や死について考えるきっかけになると思いますか。

Bグループ

- 1 あなたは生と死に対する考え方、受け止め方がありますか
- 2 臨床（実習含む）の経験はありますか
- 3 終末期看護の経験はありますか
- 4 今まで、「死」についての本を読んだり講義を受けたことはありますか
- 5 身近な人の死に出会ったことがありますか
- 6 自分が、死ぬかもしれないと感じたときはありますか
- 7 家族が死ぬかもしれないと感じたときはありますか
- 8 6、7以外のことで、死について考えたことがありますか
- 9 あなたは死にたいと思ったことがありますか
- 10 現在の生活に満足していますか
- 11 今生きがいを持っていますか
- 12 自分の死に方について、現在のあなた自身の考えを聞かせてください
- 13 将来の夢・希望はありますか
- 14 死後の世界はあるとおもいますか

Cグループ

- 1 身近な人の死を経験したか
- 2 ターミナルステージにある人と関わりを持ったことがあるか
- 3 告知された方に関わったことがあるか
- 4 自分が死ぬかも知れないと感じたことがあるか
- 5 自殺を考えたことがあるか
- 6 死について考えたことがあるか
- 7 死についてのイメージはどうか
- 8 分娩見学をしたことがあるか
- 9 生きるということについて深く意味を考えたことがあるか
- 10 自分という存在について考えたことはあるか
- 11 生と聞いてあなたはどんなイメージを持っているか
- 12 誕生日に親に感謝したことはあるか
- 13 生命の誕生は尊いものだと思うか
- 14 生や死についての印象が残っている学習経験があるか
- 15 死に関して情報をどれで得たか
- 16 何歳で死にたいか
- 17 どのように死にたいか
- 18 どこで死にたいか
- 19 誰に見守られて死にたいか
- 20 あなたにとって死とは何ですか
- 21 あなたにとって生とは何ですか

* (10)は、あとで筆者が挿入した。句読点等は原文通りである。

番組などをみたことはあるか」「生死について印象に残っている講義はあるか」など5項目がみられた。

(4) 生について

このカテゴリーに包括される項目は13あり、「自分の死」に次いで多い。「自分という存在について考えたことはあるか」「何のために生まれてきたのかを考えたことがあるか」といった哲学的な問いから、「現在の生活に満足しているか」「生きがいを持っているか」「将来への夢や希望を持っているか」といった、生活満足、生きがい感を問うもの、「誕生日に親に感謝したことはあるか」「生命の誕生は尊いものだと思うか」といった、いのちの誕生に纏わるものなど、質問の性質は多様で、若い学生の生命の躍動感が反映した質問項目になっている。

(5) 臨床実習と生と死

ここでは「終末期看護の経験はあるか」「告知された方に関わったことがあるか」といった実習における臨死患者との体験を問うものや、「延命治療についての考えを教えてください」「脳死は人の死と思うか」など、具体的なテーマに対しての個々の答えを求めるものなど、看護学生としての特徴をもったカテゴリーといえよう。

2) 調査の際のインフォームド・コンセント

3グループはそれぞれ、Y看護学院の学生全員を対象に質問紙調査を実施した。その際のインフォームド・コンセントの内容は表4の如くである。

AとCの2つのグループは調査のお願いの中において、「看護者が死に関わっていく場合にはその人が生や死についてどのように考えているかが大きく影響すると言われてい」ること、「自分の中で死生観についてはっきりととらえられていなかったら、どう接していいかわからず、医療従事者（看護者）としての役割を果たせない」ことがあることを述べ、看護学生に死

生観を調査する意図と意義を説明している。

3) 質問紙調査の結果

ここでは、質問内容の重複をさげ、各カテゴリーの特徴を代表していると思われる質問項目について紹介する。調査対象の教育課程と年次進行の特徴を反映させるために、グラフは属性と全体集計で表記した。また、助産婦科は15名と少数であることから、基礎的な看護学の課程を修了しているという共通性により保健婦科とともに集計した。またグラフを補う資料は表で示した。

1) 自分の死

「死について考えたことがあるか」という問いに対しては、頻度の差はあるものの、学生全体の97.6%が「ある」と回答しており、「まったく考えない」と答えた学生は、わずか2.4%であった。学年別には、大きな差は無かった(図1)。

「死にたいと思ったことがあるか」という問いには、学生全体の53.7%が「はい」と答えている。特に2部課程2年は76.6%と高いが、その理由は不明である(図2)。

「どのように死にたいか」という問いには、老衰が75.9%と一番多く、次いで病気、その他、事故の順である(図3)。

「どこで死にたいか」という問いには、自宅が79.7%、病院・ホスピスがそれぞれ5.5%で、自宅が圧倒的に多かった(図4)。

(2) 家族・身近な人の死

「家族や身近な人が亡くなったことがあるか」という問いには、全体の81.3%の学生が「ある」と答えており(図5)、そのうち69.4%の学生は、その経験が死について考えるきっかけになったと答えている(表5)。

(3) 死の学習

「死や生について印象に残っている学習経験があるか」という問いには、全体で59.5%の学生が「ある」と答えている。またそれは、看

表3 質問のカテゴリー

— 自分の死 —

あなたは生と死に対する考え方、受け止め方がありますか
 死ぬとはどういうことか考えたことはありますか。
 自分が死ぬかも知れないと感じたことがあるか
 自殺を考えたことがあるか
 自分が、死ぬかも知れないと感じたときはありますか
 死について考えたことがあるか
 死についてのイメージはどうか
 6、7（自分の死・家族の死）* 以外のことで、死について考えたことがありますか
 あなたは死にたいと思ったことがありますか
 自分の死に方について、現在のあなた自身の考えを聞かせてください
 何歳で死にたいか
 どのように死にたいか
 どこで死にたいか
 誰に見守られて死にたいか
 あなたにとって死とは何ですか
 死後の世界はあると思いますか () * は、あとで筆者が挿入した。

— 家族・身近な人の死 —

身近な人が亡くなったことがありますか。
 身近な人の死を経験したか
 身近な人の死に出会ったことがありますか
 家族が死ぬかも知れないと感じたときはありますか

— 死の学習 —

今まで、「死」についての本を読んだり講義を受けたことはありますか
 あなたは死を題材にした本を読んだり、映画やテレビ番組などをみたことはありますか*
 そうしたもの*に接することは生や死について考えるきっかけになるとは思いますか
 生や死についての印象が残っている学習経験があるか
 死に関して情報をどれで得たか

— 生について —

あなたは自分は何のために生まれてきたのかを考えたことがありますか。
 あなたは生まれてきたことを感謝していますか。
 あなたは長生きしたいと思っていますか。
 あなたは将来への夢や希望を持っていますか。
 生きるということについて深く意味を考えたことがあるか
 現在の生活に満足していますか
 今生きがいを持っていますか
 生と聞いてあなたはどんなイメージを持っているか
 誕生日に親に感謝したことはあるか
 将来の夢・希望はありますか
 生命の誕生は尊いものだと思うか
 あなたにとって生とは何ですか
 自分という存在について考えたことはあるか

— 臨床実習と生と死 —

臨床（実習含む）の経験はありますか
 あなたは脳死は人の死だと思えますか。
 延命治療についての考えを教えてください。
 ターミナルステージにある人と関わりを持ったことがあるか
 死を目前にした（余命6ヶ月と診断されている）患者を看護したことがありますか
 終末期看護の経験はありますか
 告知された方に関わったことがあるか
 分娩見学をしたことがあるか

護科1部課程では3年生が高く、2部課程では2年生が高く、特に保健婦・助産婦課程の学生は83.6%の学生が「ある」と答えており、看護の学習の深まりが示唆される(図6)。

「死を題材にした本を読んだり、映画やテレビ番組などを見たことがあるか」という問いには90.3%が「ある」と答えており(表6)、「そういったものに接することは生や死について考えるきっかけになると思うか」という問いには94.2%が「そう思う」と答えている(表7)。

「死の関しての情報を何から得たか」という問いには、テレビ・ラジオ、講義、文献、新聞の順に多く、マスコミからも多くの情報を取り入れていることがわかる(表8)。

(4) 生について

「生命の誕生は尊いものだと思うか」という問いには、94.2%の学生が「思う」と答えているものの(図7)、「誕生日には親に感謝したことがあるか」という問いには、43.0%の学生が「ない」と答えており(図8)、観念と実質の間にギャップがあるようにも思われる。

「今生きがいをもっているか」という問いでは、61.9%の学生が持っていると答えており、特に保健婦・助産婦科の学生が75.9%と高い(図9)。

(5) 臨床実習と生と死

「ターミナルステージにある人と関わりを持ったことがあるか」という問いには、当然のことながら学年が上がるに従って多くなり、全体では45.7%の学生が関わりを持っている。その中で保健婦・助産婦科の学生が74.5%と最も高い(図10)。さらに、関わりを持った学生が、その時どう感じたかという問いには、「できる限りのことをしてあげたかった」64.7%、「死について深く考えるようになった」47.4%、「無力感を感じた」42.9%、「人間関係の大切さを知った」32.3%(複数回答)という回答状況であった(表9)。

「脳死は人の死と思うか」という問いについては、「わからない」という答えが一番多く、全体の41.5%をしめている。続いて「思う」32.9%、「思わない」23.5%と続く。(図11)。

「人工呼吸器をつけても生きられる限り生きの方がよいと思うか」という問いには、「わからない」46.4%、「いいえ」44.3%で、「はい」と答えた人はわずか8.3%であった。特徴的なのは、保健婦・助産婦科の「いいえ」が72.5%と突出していることである(図12)。

表4 調査の際のインフォームド・コンセント

Aグループ

現代は高度医療が発達していますが、それでも人間としては死は避けることのできないものです。看護者が死に関わっていく場合にはその人が生や死について大きく影響すると言われています。

そこで私達は今看護を学んでいる学生が生や死について考えるときはどんな時なのか、またどういう考えをもっているのかを知りたいと考えています。

講義や実習でお忙しい時期とは思いますが、アンケート調査にご協力をお願い致します。

Bグループ

私たちは今、人が生きることや死ぬことについてどのような考えをもっているかを調べています。皆さん、実習や試験などでお忙しいこととは思いますが、ぜひこのアンケートにご協力下さい。なお、お答えいただいた内容はこの研究の目的以外には使用いたしません。

Cグループ

臨床実習や家庭訪問実習の中で、私たちは医療従事者（看護者）として、生と死に出会う（出会った）ことがあると思います。そういう時、自分の中で死生観についてはっきりととらえられていなかったら、どう接していいかわからず、医療従事者（看護者）としての役割を果たせない（果たせなかった）ということにつながると思います。そこで、今、看護学生がどのように生や死について考えているのか知りたいと思いアンケート調査を行います。（中略）大変お忙しい時に申し訳ございませんが宜しくお願いいたします。

表5 身近な人の死の経験が、死について考えるきっかけとなったか

	な っ た	ならなかった	よくわからない	無 回 答	合 計
人数	163	16	51	5	235
%	69.4	6.8	21.7	2.1	100

表6 あなたは死を題材にした本を読んだり、映画やテレビ番組を見たことがあるか

	あ る	な い	無 回 答	合 計
人数	261	26	2	289
%	90.3	9.0	0.7	100

表7 そういったもの（表6）に接することは生や死について考えるきっかけになると思うか

	非常に思う	思 う	あまり思わない	無 回 答	合 計
人数	136	136	12	5	289
%	47.1	47.1	4.2	1.7	100.1

表8 死に関する情報を何から得たか（複数回答）n=289

	テレビ・ラジオ	講 議	文 献	新 聞	友 人	教育用ビデオ
人数	122	117	97	51	18	17
%	42.2	40.5	33.6	17.6	6.2	5.9

表9 ターミナルステージにある人と関わってどう感じたか（複数回答）n=133

	人 数	%
できる限りのことをしてあげたかった	86	64.7
死について深く考えるようになった	63	47.4
無力感を感じた	57	42.9
人間関係の大切さを知った	43	32.3
死の看護が学べた	22	16.5
逃げ出したかった	10	7.5
何も感じなかった	1	0.01
どうしていいか分からなかった	0	0
充実感を感じた	0	0

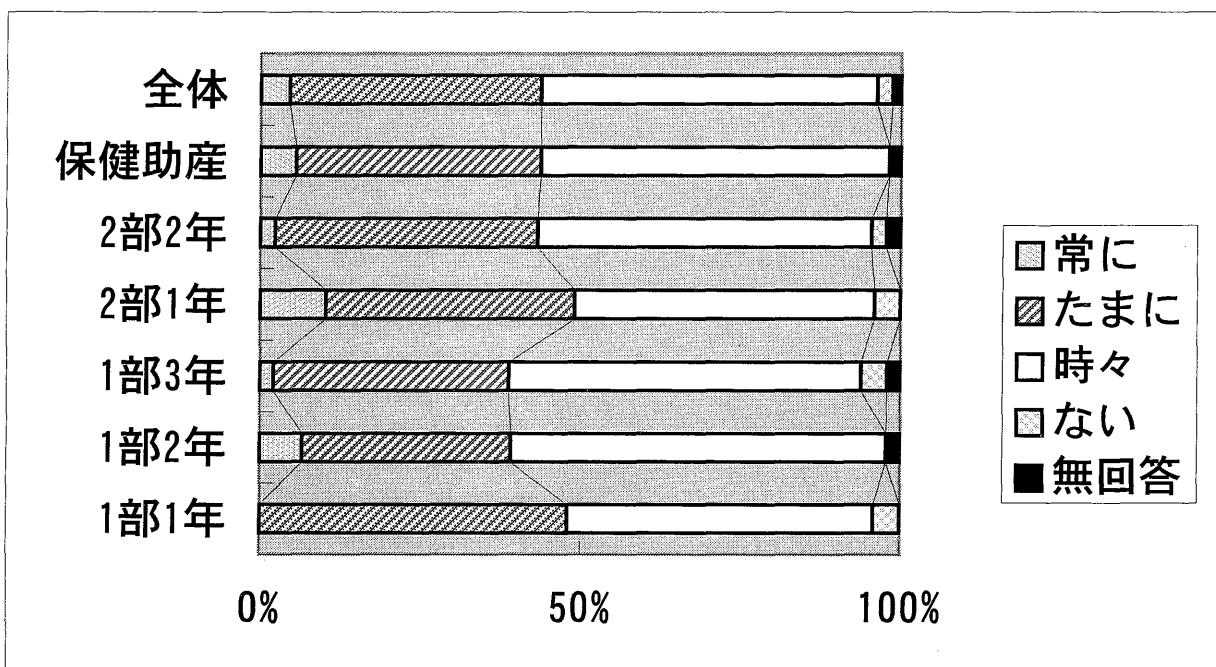


図1 死について考えたことがあるか

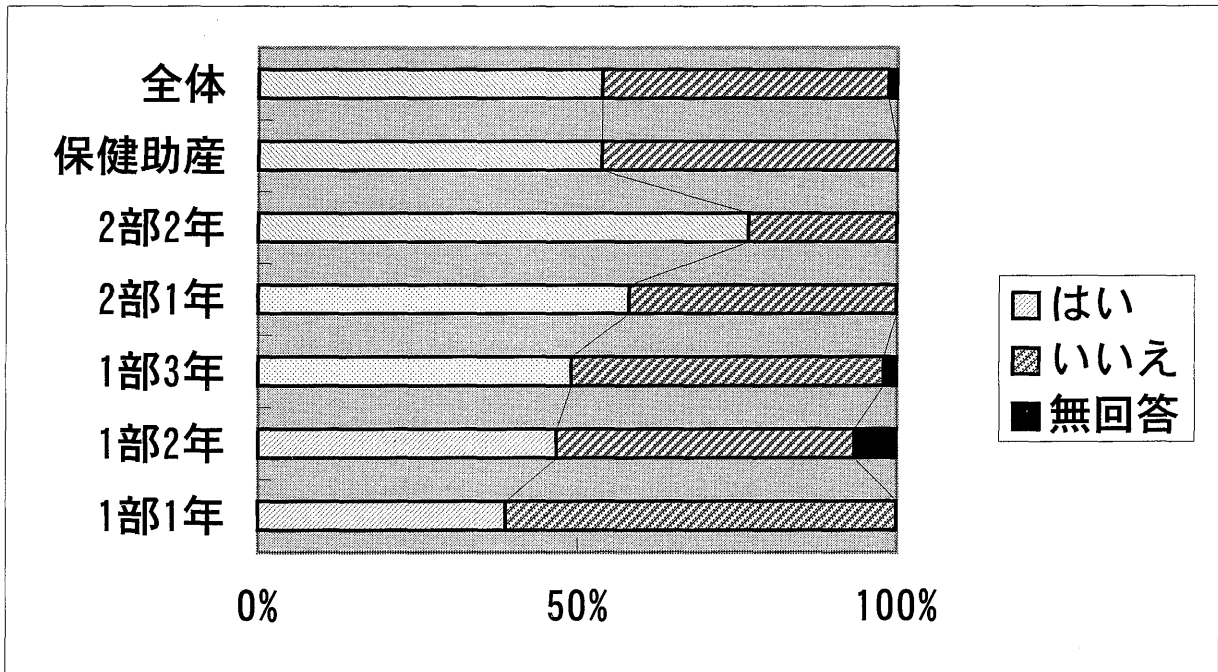


図2 死にたいと思ったことがあるか

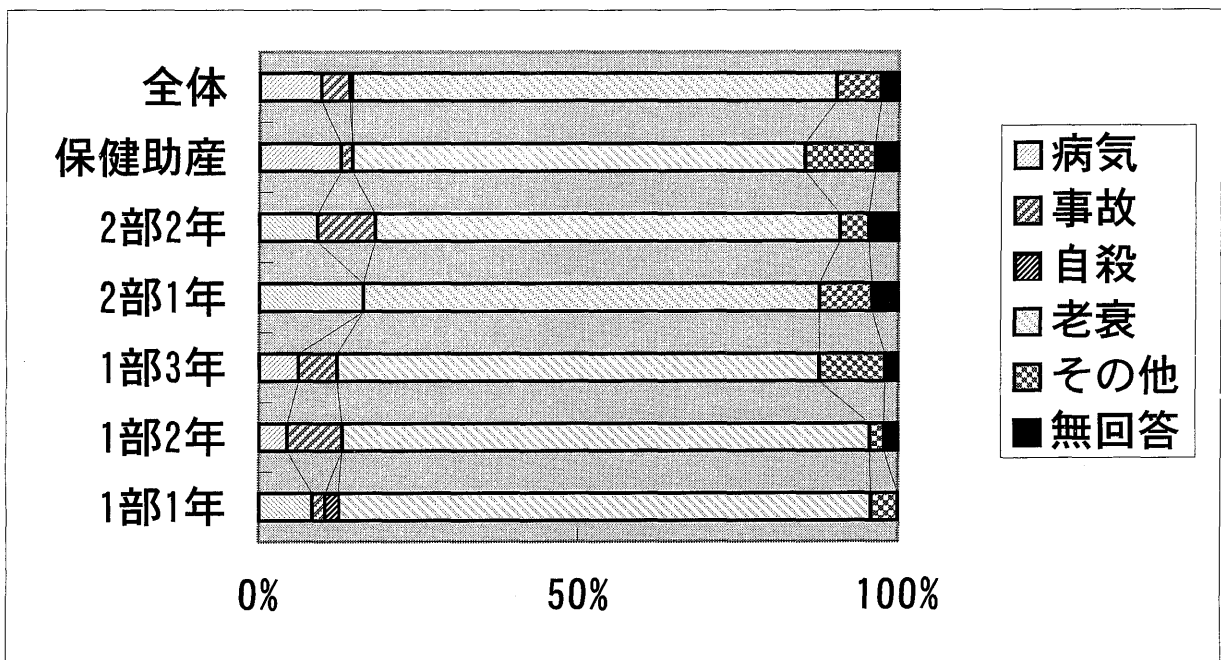


図3 どのように死にたいか

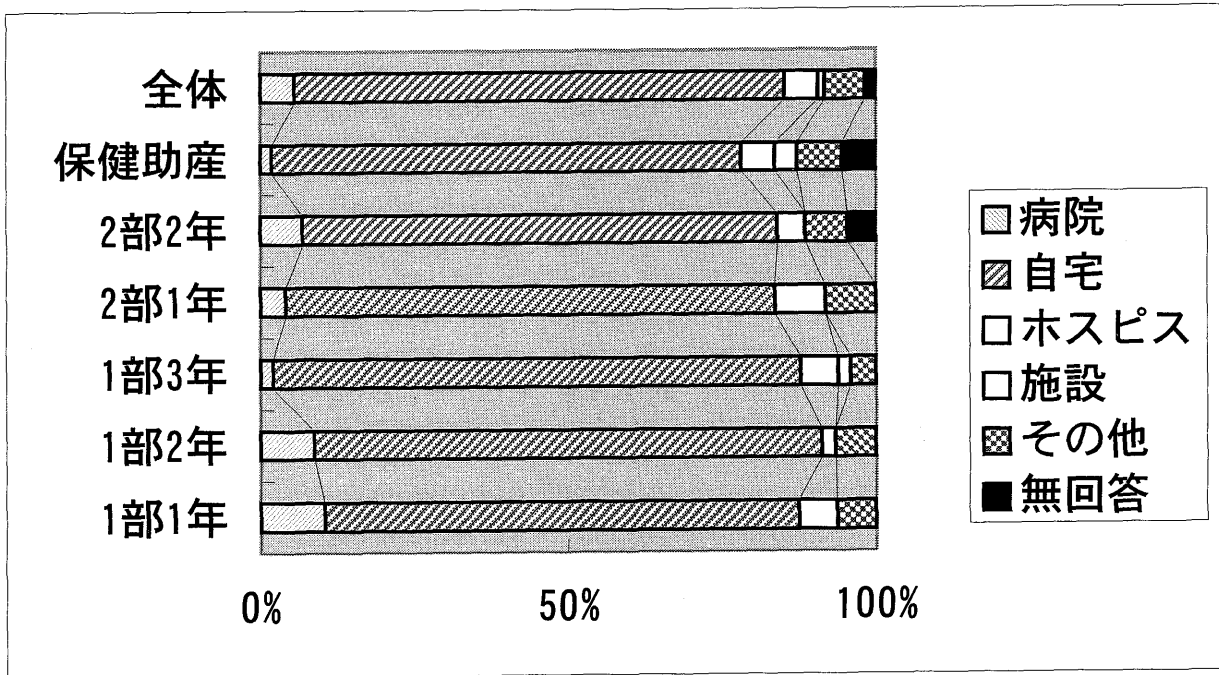


図4 どこで死にたいか

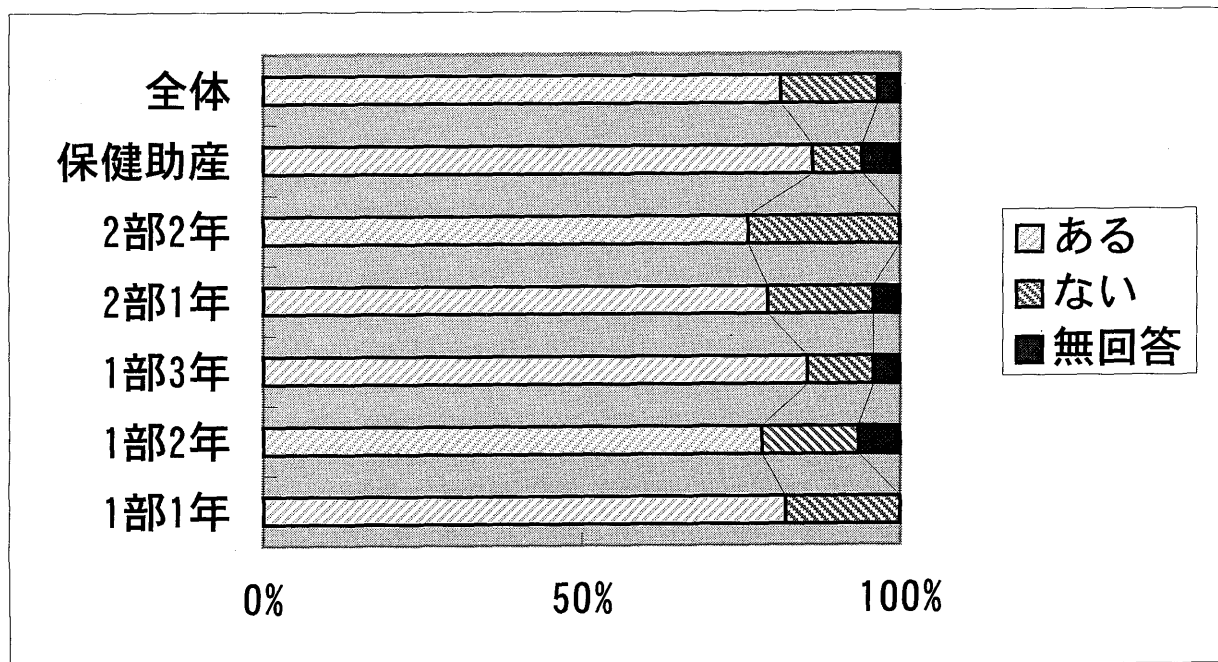


図5 身近な人が亡くなったことがあるか

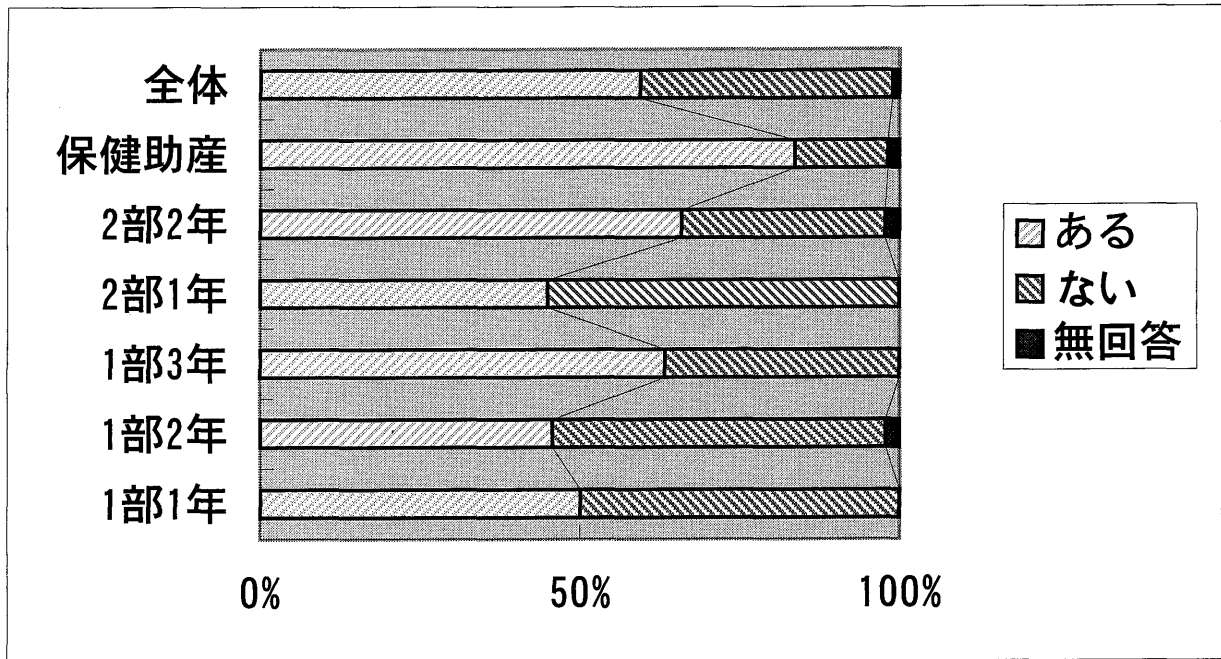


図6 死や生について印象に残っている学習経験があるか

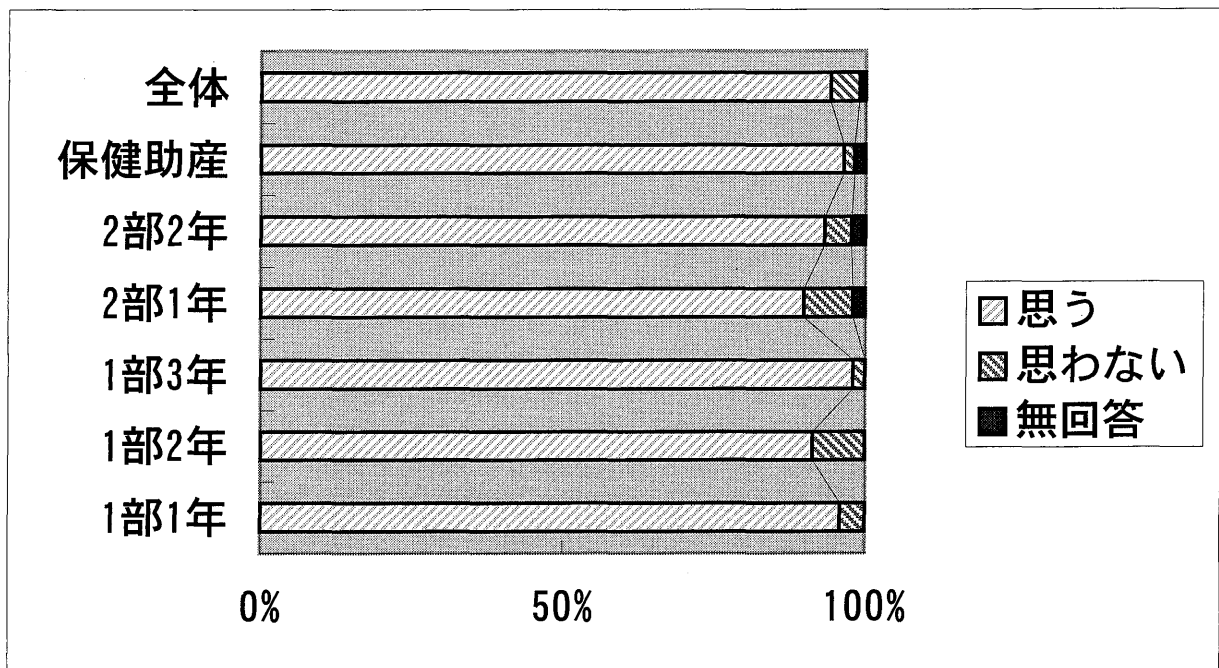


図7 生命の誕生は尊いものだと思うか

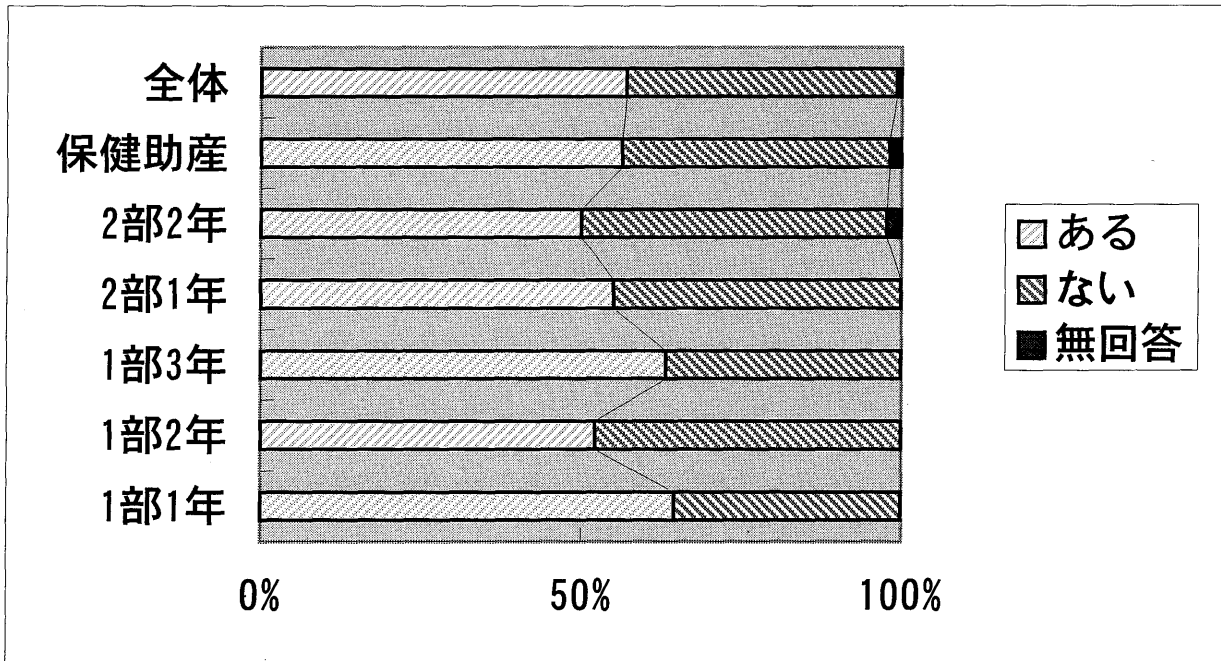


図8 誕生日に親に感謝したことがあるか

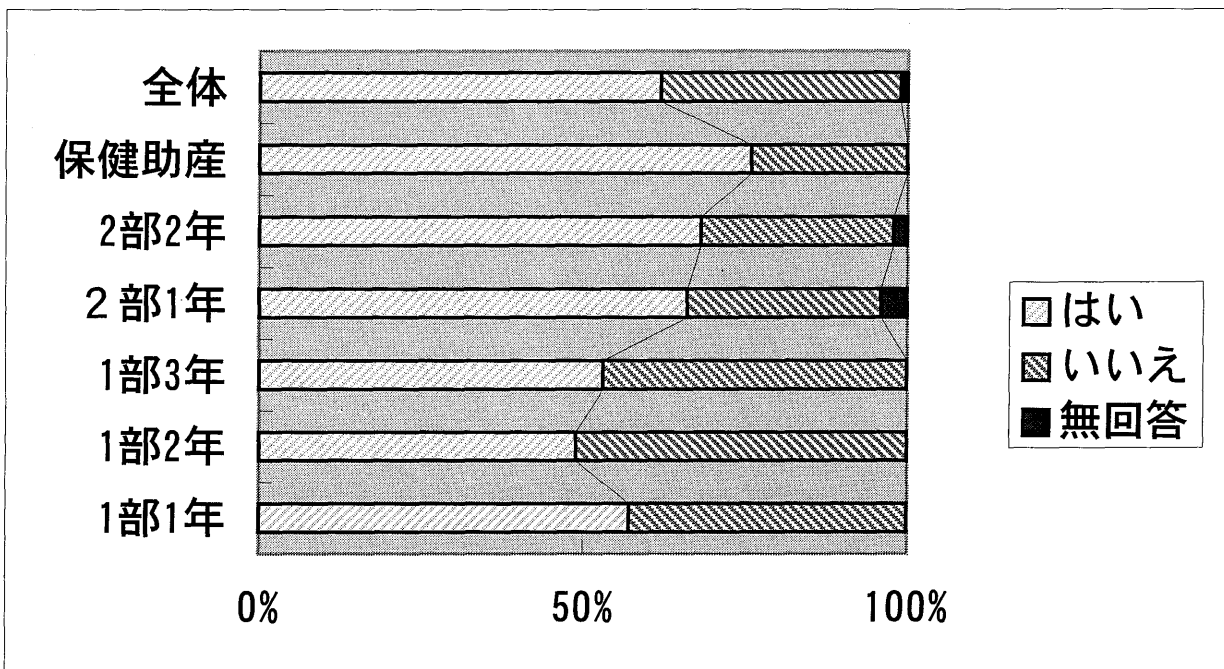


図9 生きがいを持っているか

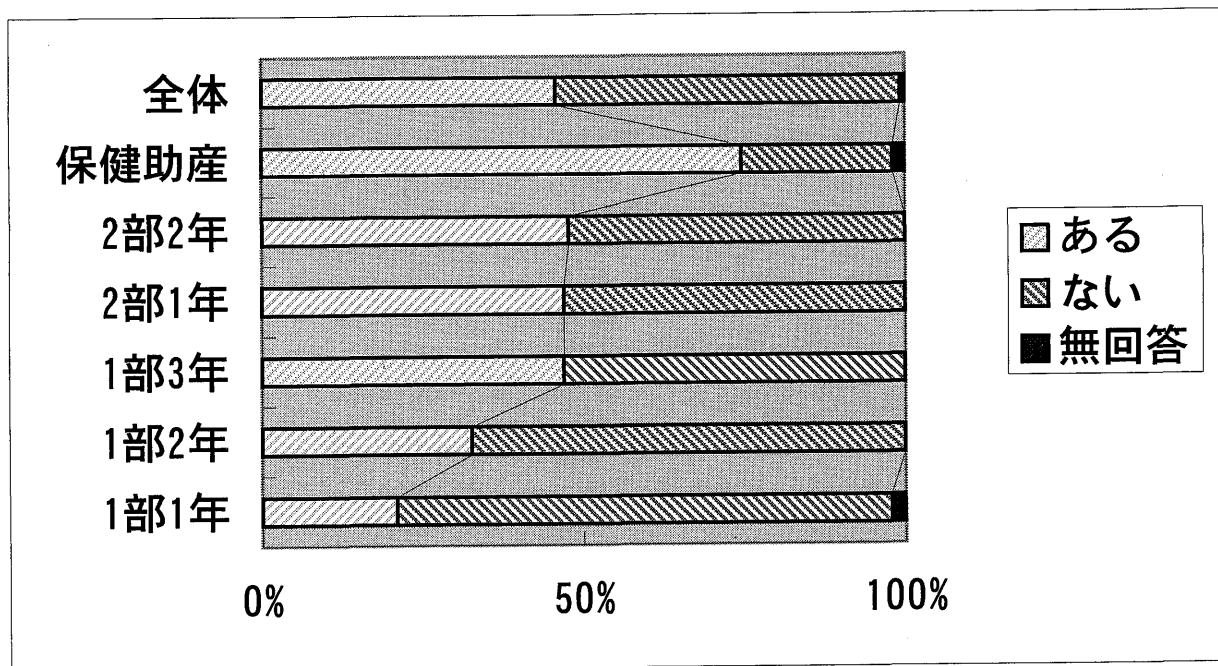


図10 ターミナルステージにある人と関わりを持ったか

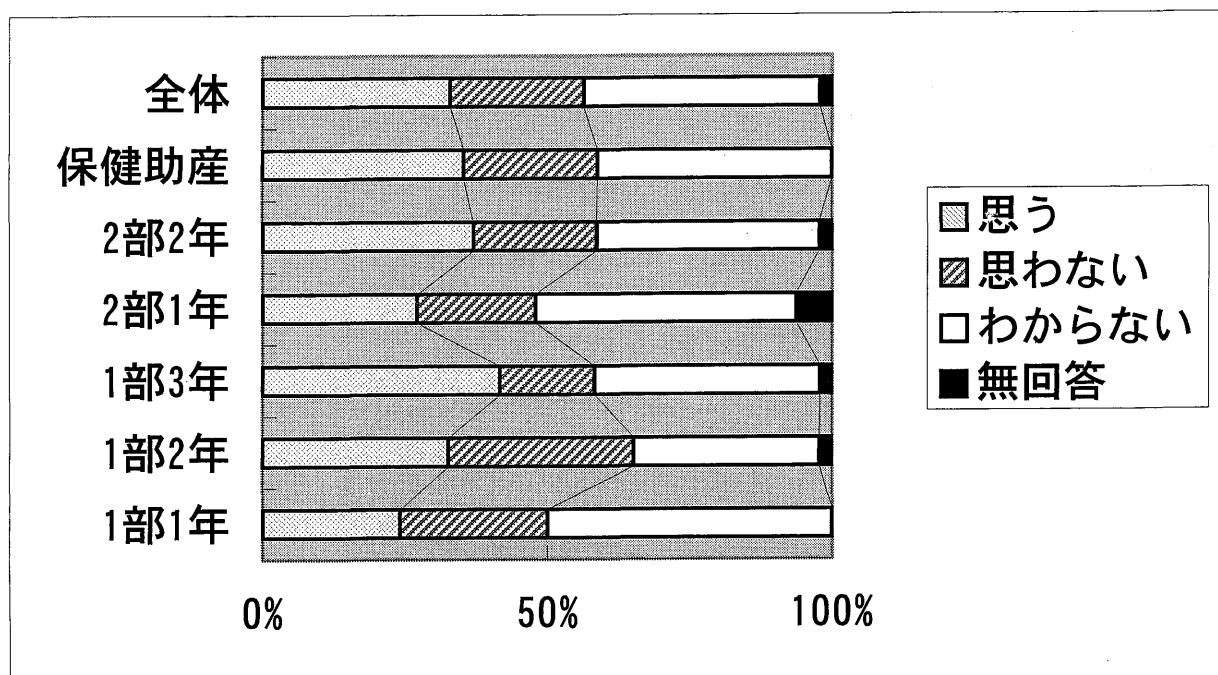


図11 脳死は人の死と思うか

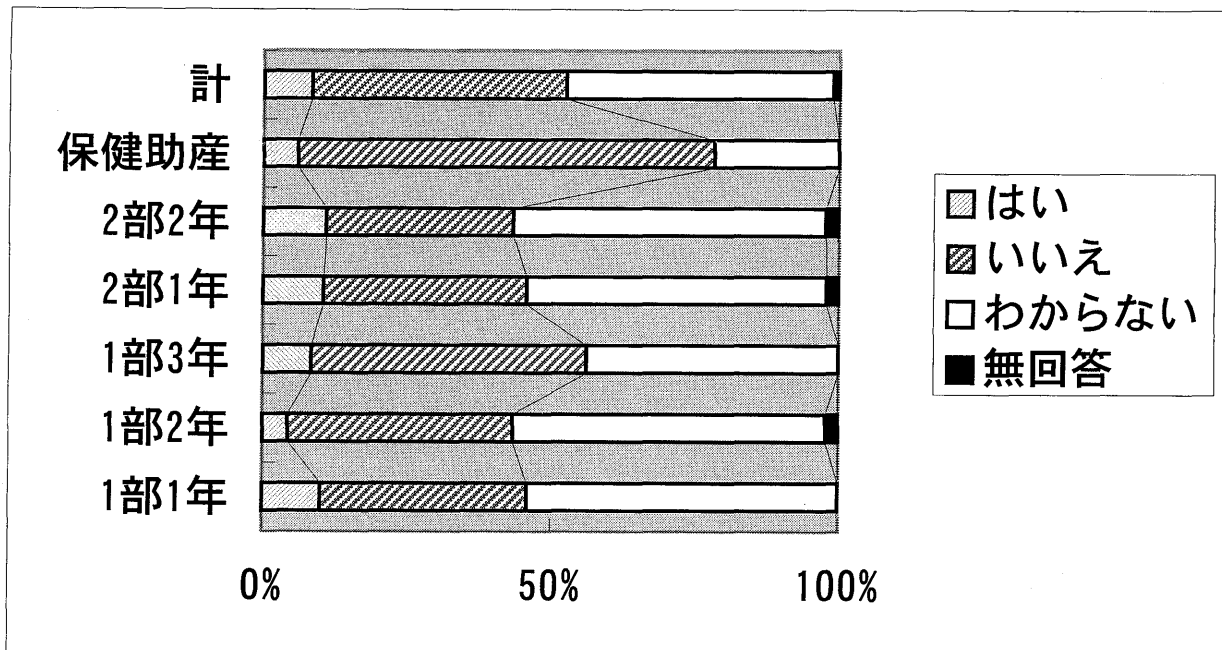


図12 人工呼吸器をつけても生きられる限りは生きた方が良いと思うか

IV 考察

学生による質問紙調査の結果から、以下の事が読み取られた。

第一に、学生の作成した質問項目は、その内容から「自分の死」「家族・身近な人の死」「死の学習」「生について」「臨床実習と生と死」の5つのカテゴリーに分類できた。それは、生と死のついての質問項目がバランスよく配当されており、死の学習や、脳死や、延命治療や告知の内容にも触れた豊かなものであった。その質問紙の作成の背景には、学生が、自分自身の生き方や死に方の考えを確かなものにするためには、重要他者の死や、死の教育や、臨床実習などが影響を与えているのではないかという仮説が潜在しているようにも思われる。また、調査を行う際のインフォームド・コンセントでは、死生観と看護との関連に踏み込んでいる。

第二に、「自分の死」については、どこで、どのように死にたいかという質問もみられた。

これらの質問には、約80%の学生が自宅で死

にたいと答えている。この数値は一般人を対象に行った調査の56% (デーケン,1995,P42) を上回っている。また、学生の約76%が死ぬなら老衰でと考えている。しかしこのように答えた学生が、臨床実習では、病気や事故で病院で亡くなる患者に出会うことになる。自己の理想的な終末の在り方と、闘病生活を送る患者の実態との相克に苦しむことになるかもしれない。しかしその苦しみは、患者の痛みをわかってもらう手掛かりを生み出す可能性をもっている。その意味においても、自分の死を考えておくことは重要である。

また、98%の学生が死について考えたことがあり、この結果は原ら (1993,P159) の行った調査の44.6%より遥かに高いものである。この背景には、時代の流れの中で看護学に確実に死の教育が定着したことがあげられ、死についての関心が高まってきたことが読みとれる。さらに半数の学生は過去に死にたいと思ったことがあることもわかった。

看護者と死生観との関連を考えた時、看護者

が死を否定したり恐れや不安を抱いていれば、患者との関わりに否定的な影響を与えることになる(高橋,1989. 柏木,1993)。その意味においてこのカテゴリーで死の不安の程度を把握する質問項目が見られなかったことは残念である。

第三に、「家族・身近な人の死」のカテゴリーでは、身近な人との死別体験を尋ねており、学生の約81%がその経験があると答えている。そのうち約69%が、その経験が死を考えるきっかけになったと答えている。

また死生観に関する研究の多くが、死別体験に注目している(波多野,1981. 西村, 1983. 中尾,1986)。親しい人との死別は、それを体験した人の生き死にに纏わる考え方を、確かなものへと強化していくのではなかろうか。

第四に、死生観の形成と死の教育の関連性は言うまでもない。看護教育の中だけでなく、医学教育の中にも死の教育は取り上げられつつある(高柳ら,1997)。今回の調査では、3グループともに質問紙の中に死の教育に関連する項目を作成している。そして殆どの学生が、死の学習は生や死を考えるきっかけになると答えている。また約60%の学生が生や死に関して印象に残っている学習経験があると答えている。これらの経験が、その後の看護活動にどのように影響しているかを調査していくことも、今後重要なことと思われる。

第五に、「生について」であるが、死生観の調査の多くが死についての質問に傾倒する中で、学生の作成した質問紙には、生についても目がむけられていた。そしてそこでは、生命の尊厳や、生きがいについての問いも立てられていた。人のいのちや生活に向かい合う看護者としての視点の顕れとも思われる。調査の結果、約94%の学生が生命の誕生を尊いと考えており、学年や教育課程での大きな差は見られないこともわかった。

第六に「臨床実習と生と死」のカテゴリーで

あるが、「脳死は人の死と思うか」「人工呼吸器をつけても生きられる限り生きた方がよいと思うか」という問いには、いずれも「わからない」という答えが一番多かった。このことは、生死の問題の複雑性を反映していると思われる。「死の尊厳」や「文化としての死」(立川,1997)という観点からも、この問題には単純には答えられないというのが事実であろう。その中で、後者の間にはっきりと自分の意見をもって回答しているのは、最も看護の学習を積んだ、保健婦科・助産婦科の学生であった。

最後に、質問紙からは、保健婦科の学生が多角的な視点で死生観をとらえていることが伺えた。「意識するにせよ、しないにせよ、死生観はその人の行動を決定する規範として働く」(山本, 1992,P12)といわれている。21世紀の看護を担う人材として、今後さらなる研鑽を通して、豊かに学生の死生観が構築されていくことを願うものである。

V まとめ

Y看護学院保健婦科の学生の作成した質問紙とそれを用いた調査から、Y看護学院の学生の死生観について概観した。

- 1) 死生観の質問項目は、「自分の死」「家族・身近な人の死」「死の教育」「生について」「臨床実習と生と死」の5つの視点があった。
- 2) 調査を実施する際のインフォームド・コンセントでは、死生観と看護を関連づけて、調査の意図が説明されていた。
- 3) 看護学生全員を対象に調査した結果は次の通りである。97.6%の学生が死について考えたことがあり、81.3%が身近な人との死別体験を持っていた。またこの体験は死について考えるきっかけになったと69.4%の学生が回答していた。死についての学習は、90.3%の学生が体験しており、その経験も生や死について考える

きっかけになったと答えていた。

脳死は人の死であるかや、人工呼吸機での延命についての考えは、「よくわからない」という答えが多かったが、生命の誕生については94.2%が尊いものであるととらえている。

今回紹介した質問項目の範囲においては、死の学習やターミナルステージにある患者との関わりなどの具体的な経験を尋ねる項目では学年や教育課程で相違が見られたが、その他の殆どの質問項目において学年や教育課程による特徴の差は見られなかった。

付記

この報告は、保健婦科の授業の中で学生が作成した質問紙と、その後それをういて行った調査の結果の一部を紹介したものである。学生のいきいきとした問いの立て方に、学ぶことが多かった。

この調査に御協力くださいました、山口県立衛生看護学院の学生の皆様、先生方に心よりお礼を申し上げます。とりわけ、この報告の基礎となる質問紙を作成された保健婦科の皆様に、心より感謝するとともに、今後ますます学習を深められることを祈ります。

引用文献

- アルフォンス・デーケン 叢書 死の準備教育
第2巻 死を看取る メジカルフレンド社 1995.
- 柏木哲夫 生と死を支える 朝日選書 1993.
- 原義雄・千原明 新版 ホスピス・ケア—看取りの医療への提言— メジカルフレンド社 1993.
- 波多野梗子・村田恵子 看護学生の終末期患者への援助的認識と看護行動傾向の学年

による差異 看護研究,14(1),62-72,1981.

水谷成子 死生観形成過程にある看護学生のコーピング行動の比較 看護展望,76-81,1997.

中尾久子・花田妙子・大津ミキ・奥野府夫 終末期患者の看護の段階的学習 看護教育 27,165-169,1986.

西村由紀子・佐伯輝子・北川多恵子・野口房子 看護学生の死に対する認識について—学習段階別差異— 第14回日本看護学会集録, 看護教育, 日本看護協会出版会,287-291,1983.

立川昭二 「文化としての死」の復権 死の臨床20(1), 19-20, 1997.

高橋正子 癌患者にかかわる看護婦の態度と死生観の関係 日本がん看護学会誌 3(1),93-97,1989.

高柳和江・岩崎栄 卒前医学教育における患者医師関係と死の教育 病院管理,34(1), 21-29,1997.

山本俊一 死生学のすすめ 医学書院 1992.

柳田邦夫 犠牲—サクリファイスわが息子・脳死の11日 文芸春秋, 204, 1995.

Title: What nursing school students think about the realities of life and death
-Based on a questionnaire drawn up by students-

Author: Aiko TANAKA and Susumu IWAMOTO
School of Nursing, Yamaguchi Prefectural University

Abstract:

Students majoring in public health nursing at "Y Nursing School" were asked to devise and implement a questionnaire that would poll nursing students about their views concerning life and death. All students at Y Nursing School (n=296) were then surveyed. The content and results of the survey follow.

- 1) Questions concerning students' views on life and death were based on the following five points: The students' own death, death of a close family member, death education, life, and clinical practice and life and death.
- 2) Before taking the survey students were told the purpose of the study: To seek their views on life and death issues and nursing.
- 3) The results of the survey are as follows: 97.6% of the students surveyed had thought about death before. 81.3% had experienced the death of a close loved one and these experiences had made them think about life and death issues. Many students answered "I'm not sure" to questions such as whether brain death is the end of life or not, or when in answering a question about whether they were for or against the prolongation of life with an artificial respirator. On the other hand 94.2% of the students considered birth a very precious thing.

Even though some discrepancies as a result of differences in age and educational experience among students were found when students were asked about their concrete experiences, e.g. how much they have learned about death or if they had been involved with terminal-stage patients, no significant differences were noted among students of different ages and educational experiences in regards to other questions.

Key Words: nursing school students, view of life and death, questionnaire
